

居酒屋「、」その2

kojimatsu

午後4時、いつものようにワゴン車のエンジンをかけ職場に向かった。

さすがに10月ともなると街の空気も心地よい。

とは言え「職場に向かう」という表現は正確ではない。

職場が目的地へと移動しているのである。

俺の職場はこのワゴン車。

移動式の居酒屋を営んでいる。

元は大手化学メーカーの営業課長をしていたのだが

リーマンショックの際にもって行き場のない責任を取らされたのだ。

会社は無情にも俺を見放したが

その時の退職金でこのワゴン車を購入し改造した。

会社は俺に「自己都合」で身を引く事を強引に勧めた。

「会社都合」では世間体が悪いからだ。

結局、会社自体の業績はその後も戻らず

大々的なリストラを行ったようだ。

その頃には、どこもかしこもリストラの嵐だったから

普通の事のように、このイベントは行われた。

しかし俺のは、社内では当然の事、世間でも粛清の先駆者であった。

だからこそ会社は「自己都合」を強要しようとした。

「君もここまで、会社に世話になったじゃないか。」

そんな訳のわからないことを言って上司は俺を説得した。

退職のその日、俺は総務部長に挨拶に行った。

大企業では、一営業マンが総務部長の顔見ることなどめったにない。

当然俺も、総務部長とは面識がなかった。

普通であれば営業課長であったとは言え

挨拶に行くことなどないであろう。

だが俺には挨拶に行く理由、行かなければならない理由があった。

俺の退職の扱いを「会社都合」にしてくれたのは

他ならない総務部長であったと聞いたからだ。

表向き会社は「自己都合」扱いを譲らなかった。

しかし退職金などの金銭的処遇を「会社都合」のそれと同じ

いや、それ以上にした。

その交渉を総務部長が一人でやってくれた。

本来それをやるべき営業部長は

影にひっそり身を隠していた。

総務部で用意された応接室。

座り心地のよいはずのソファは腰の落ち着けどころがなかった。

初対面に近かった総務部長は当時52歳だった。

40代で部長になったのだから所謂エリートなのだろう。

関西出身でコテコテの関西弁。

身だしなみは若く、いつもスーツのお尻のポケットから

派手なハンカチが少しだけ顔を出している事で有名だった。

俺は多くを話すことなく部屋を去ろうと席を立った。

ドアノブに手かけた時、部長が俺の名を呼んだ。そして

「堪忍やで」

俺は何とも返答できず、背を向けたま応接室のドアを閉めた。

そして俺はその彼のおかげもあって、今こうして移動式の居酒屋を営んでいる。

ワゴン車はいつもの公園の脇に着いた。

季節柄、公園は落ち葉に埋もれている。

この時期は風が舞うと店に吹き込んできて厄介である。

尤も、屋外店舗なのだから仕方がないのだが。

そう言えば9月の半ば頃からだろうか。

公園の木の陰から時折誰かが見張っているような事がある。

日も暮れてからの事なので確信はないのだが

おそらく間違いはないだろうと思う。

もしかしたら地元のヤクザが

ショバ代をせしめようと狙っているのかも知れない。

ただ、ここの公園の近くに警察署があるので

迂闊には手を出せないのだろう。

実はここに店を出した理由の1つがそれではあった。

今日は今のところ、見張られている気配はなさそうだ。

今日も17:00位には店を開けたものの

1時間たってもお客は来なかった。

気候的に寒くなってきた事も影響するのだが

もしかすると、件のヤクザの計画的な嫌がらせかも知れないと思った。

こうなったら、そいつを見つけて

白黒はっきりつけてやるため

公園の中を探そうと思った矢先だった。

一人のお客が現れた。

「お邪魔します。」

そのお客は、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。

「いらっしゃいませ。」

白髪の老人風だった。

なぜ老人風かと言えば髪の色ほど

全体的に老けてはいない印象だったからである。

そして何より、このお客とは以前に会っているような気がした。

ほっと一息ついたお客と目が合ったその時

俺の記憶がフラッシュバックした。

総務部長だった。

今は白髪で、お互いに合ったその目も

どこに焦点があるのがわからない虚ろな目だった。

しかし間違いなく彼だった。

「ビールをいただけますか。」

ゆっくりとした口調で彼は話した。

俺は気持ちの整理がつかないままビールをグラスに注いだ。

グラスの中の泡の調節が不覚にも狂った。

「どうぞ。」

気を取り直して、黒の革のコースターの上に

ビールを置いた。

「ありがとう。」

彼はそう言ってビールを一口だけ飲んだ。

泡の量が多かったせいか、彼の口の周りで

ビールの泡が髭となった。

急いでおしぼりを出す俺。

「すみません。遅くなりました。」

彼はこちらの意図に気がつかなかったようで

おしぼりを広げて入念に手を拭いた。

「ビールの泡が多くて、口の周りが・・・申し訳ありません。」

俺がそういうと彼は

「あー、この白髪には丁度いいでしょう。」

と私の目を見て笑いながら、おもむろに口の周りをそれで拭った。

この時点でも彼が俺の正体に気付いていると思えなかった。

その場を逃れるように、彼のための最初の一皿を用意した。

朱と金が鮮やかな伊万里焼の小鉢にそれを盛り付け

箸と共に彼の前に出した。

「里芋の味噌和えです。」

秋の野菜である里芋。味噌に砂糖を加え酒でのぼして和える。

最後に上から白ゴマをかけた逸品。

彼は俺の言葉など聞こえていないように

箸を持って、里芋を一口食べた。

「柚子の香りがいい。」

「そうなんです。最後に柚子の皮を卸し金で少し。」

そして彼はビールを口に含む。

「このお店は長いのですか。」

「そうですね。かれこれ4年位ですか。」

彼は本当に俺に気付いていないのだろうか。

彼は自分のタイミングで少しずつビールと里芋を口にした。

俺はそのリズムにはまることを避けるように

次の料理のために、出汁の入った鍋に火をかけた。

泡が多かったせいか彼のビールは既になくなりかけていた。

「もう1杯、如何ですか。それは泡が多かったので

2杯目はサービスします。」

「ありがとう。実は医者にあまり飲んではいけないと言われていて」

「それは失礼しました。」

「でも、まあいいか。ではお言葉に甘えて。」

彼は俺に全く気付くことなく、俺も素知らぬ振りで2杯目のビールを

彼にサーブした。

「お医者って・・・肝臓でも悪いのですか。」

「臓器じゃなくって・・・精神科に通っています。」

「せつ精神科ですか。」

それで俺の事がわからないのか。そう考えながら

煮立たせず、しかし湯気の出ている鍋に具を加えた。

「私ね、大きな会社の総務部長をしていたんです。」

俺は手が止まりそうになった。

それを悟られないように、鍋の中の具がさっと火が通ったことを確認して

少しいびつな藍色の小鉢に出し汁と具をよそった。

「まぐろの葱間です。今日は旬のいい魚が入らなくてすいません。」

濃いめの醤油ベースの出し汁の中に、まぐろと葱にさっと火を通す。

本来なら鍋としての一品だが、普通の鍋のようにぐつぐつ火を通す必要もなく

今日のような肌寒い日には丁度いい。

「あれは3年前だったかな。リーマンショックの後でした。」

この物語の始まりに、俺は今にも遠くへ行きたくなった。

「1年経って、会社の業績はガタガタだった。」

彼は葱間の小鉢を手に取り、“ふー”っと冷ましながら

出汁をすすった。

「500人規模のリストラを行う事が会社で決まりました。総責任者は私でした。」

目の焦点が合わないままビールを一口飲む音だけが聞こえた。

「総責任者って言ってもね。指示だけをして見ていればいいというわけじゃない。ましてやリストラなんて仕事、誰がしたいものですかね。」

「そうですね。」

彼はこの段になっても、俺の事には一切関心がないようだった。

「結局、自分が全員説得しました。尤も自分から辞めたいという人も多くいたので。ただ、そういう人は若い人や能力のある人が多いのです。そういう人には逆に留意を迫りました。特に若い人は私が総務部長として責任もって採用した優秀な人達でした。でも業績が一時悪いだけで自主的に辞めるのですから、それも私の責任ですね。」

そこまでゆっくりと話して彼は、まるで熱燗でも呑むようにビールで舌を湿らせた。

「リストラの対象となった人は、色々な人たちがいます。私自身も内心では“この人は確かにその対象になるな。”と思える人もいました。でもね。採用した会社が無理やり従業員から職場を奪う権利なんてないと思いませんか。」

そう問いかけられて、俺が返答に困っていることなど気に掛けず彼は続ける。

「“会社を守るため”と言われてもね。誰のために守る会社なのでしょう。働く人がいての会社だと思うのですよね。今は勿論、あの時ですら私の歳では青臭い意見なのかも知れませんがね。」

そうして、葱とまぐろを一緒に箸でつまんで口に入れた。

何かを思い出すように黙ったまま口を動かして、そしてビールを一口。

俺はその沈黙に耐えられなくなり、用意してあった七輪に

鶏を皮からのせ、そしてもう一つの食材も網にのせた。

彼は小鉢を見つめ、葱とまぐろを吟味するように箸でつまみ

舐めるようにビールを飲んで、それらを食べた。

俺は相変わらず、彼がここで俺の正体にバレることを恐れて七輪に集中した。

鶏の皮が七輪の上でパリッと焼けたのを確認して身を焼くためにひっくり返した。

そしてもう一つの食材も全体に火が通り始めたのを確認して

それを手につかみ裂いた。

それは縦に長く裂けた、細く細く。

焼けた鶏に適当に包丁を入れ

黒から茶へとグラデーショーンのかかった萩焼のお皿に盛る。

そして上から細く咲いたそれをのせた。

更に、酢橘と岩塩を添える。

「丹波地鶏と丹波の松茸の焼き物です。」

「これはいい匂いだ。どちらも丹波なのですね。」

「そうです。酢橘を絞ってお好みに岩塩を使ってください。」

彼の決して力強くないその手で酢橘が全体に絞られ

鶏の上に松茸をのせ、湯気の軌跡は彼の口まで描かれた。

少し熱かったのか、彼はほっぺたを少し膨らませてゆっくりと食べた。

「美味しいですね。」

そう言って飲んだビールは残り少なかった。

「私は結局、会社の仲間の肩たたきをしながら、同時に留意をする。そんな事を3ヶ月続けました。このリストラは3ヶ月で達成すべき目標でした。そして3ヶ月後499人のリストラを行いました。この時私の精神は異常を来しました。こんな矛盾した、しかも仲間の人生を左右するような事をしたのですから当然かもしれません。」

「計画は500人ではなかったですか。」

彼が言いたかったの“人数”ではなく、“精神的困難”だったのかも知れなかったのに。質問を投げた後に俺は思った。焼き物をしたせいか喉が渇き、水を一杯口に含んだ。

「最後の一人は私でした。」

そう言って彼は微笑んで、鶏を口に入れた。

「目標が達成できなかった責任を取らされたのですか？」

「いいえ」

彼は続けた。

「最初から決めていました。仕事の上での役目とは言え、誰が500人ものリストラをして、そのまま能々と会社に残ることができるのでしょうか。」

彼が残り少ないビールを舐める。

「あの当時は、いや今でもリストラなどは日常茶飯事で、その為に責任取って辞めるなんて考える人の方が少ないでしょう。」

「“責任とって”っていうのは、カッコよすぎますね。精神科に通うようになったのです。もう職務を全うすることができなくなっただけです。」

俺はこれ以上、彼の話を書くことができなかった。

最後の支度にとりかかるために引っ込んだ。

彼は本当に俺の事がわからないようだ。

確かに時折、呂律が回らなくなるし、動きもぎこちなくなる。

リストラという闇の中で、体も心も引き裂かれてしまったのかも知れない。

彼に家族はいるのだろうか。いや、いたのだろうか。

そんな事を聞き始めれば、どこかで俺の事を思い出してしまうかも知れない。

思い出されて俺はそもそも困るのだろうか。

今の自分が恥ずかしいのだろうか。

彼は不可抗力で自分の過去を消されたのだろうか、俺は自分で希望した事の

帰結ではないのか。今更、誰に何を恥じるのだろうか。

「お客さん、はい。」

俺は彼に曲げわっぱの小さな弁当箱を渡した。

ぎこちない動きで彼の手がそれを受け取り蓋を開けた。

「あーおむすびだ。」

ご飯からのほのかな湯気にも消されそうな声がした。

「具は何も入っていないですけどね。それからこれは“けんちん汁”です。」

「けんちん汁、これは温まる。」

彼はけんちん汁をすすり、おにぎりを手に取った。

「このおむすび、ご飯の一粒、一粒がちゃんと残っていますね。」

口の中のごはんが彼の呂律を悪くさせた。

「私、この店を始める前に知り合いのお寿司屋に見習いで3ヶ月くらい働かせてもらっていて、見よう見まねで握りも練習させて・・・あ、勿論、お客様に出しませんでした。その時の感覚が生きているみたいなんです。」

彼は目をつぶって、只只おにぎりを口にした。

「おにぎりは一つの大きな塊ですが、それは大事に育てられたお米を、きちんと炊いて、それを押し付けるわけでもなく、かといって緩すぎるわけでもなく一つに纏めることで出来上がっているのだとも思います。そういうおにぎりが美味しいのだと思います。ただ、そういうことを気付かせてくれた、それは、このお店を始めなければ気がつかなかったことで、私は本当に幸せだと思います。」

彼はそれから何も話さず、おにぎりとけんちん汁を食べ、食後のお茶を茶碗で手を温めながらすすった。

「すみません。お勘定お願いします。」

そういつて彼はお勘定を済ませて、ゆっくりと腰上げた。

「ありがとうございました。」

“またお越しくください。”と俺は言えなかった。

「いいお店だ。ご馳走様。堪忍やで。」

そう言うとはずっと後ろ向いて去って行った。

その瞬間に俺は全てを悟った。

彼は俺だとわかっていた。

最初から知っていたのだ。

良く考えれば関東の“おにぎり”に対して

関西のそれは“おむすび”だった。

それでも少しずつ遠くなる彼の後姿に

俺は声をかけることができなかった。

彼のお尻のポケットからは派手なハンカチが顔を出していた。

翌日から、誰かがこの屋台を見張っているような気配は

一切感じられなくなった。